
告白の結果はドーナツ

和紙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

告白の結果はドーナツ

【Zマーク】

N1004B

【作者名】

和紙

【あらすじ】

拓の高校入学してからの初の大舞台の告白。友達に手伝ってもらつての告白。ドーナツによつて決意した告白。その結果は?告白を題材にしたドタバタ過ぎる物語。

(前書き)

和紙自身初の短編を投稿しました。

「さ、教室って、以外に広いんだな」

もう間近だろ？..自分の高校生活始まって以来の大舞台開演まで。
それなのに、訳分かんない事を口走る自分ってどうなのよ。

一向に、ミスター心拍数は俺の体を揺るがしている。

「拓^{たく}何言つてんの？落ち着けよ」

右隣の机で類杖をついて大親友（いや大悪友）の松がニヤけてる。
こなクソ！松の野郎楽しみやがって。彼女持ちだからって余裕かよ
！！

そんな余裕を見せている「ヤツ」には、天罰を与えねば！

「聖蘭高一年一組、掲示委員会の貴公子」と、長谷川拓いつきまーす

「は？」

俺は、高らかに宣誓し田をパクリさせる松に襲いかかり、勢い良
くこめかみに両拳をドリル状に捻込んだ。

悶絶する松。

その顔に少し快感を感じた。

いや、すっげえ快感を感じた。

この眉のグネリ具合がなんとも言えない。

「ちよ待てって、お前だつて帰りには：痛い、彼女持ちかもつて、だから痛いって、彼女持ちかもしれないだろ」「ちよ

その《彼女持け》つて言葉に俺の想像がピンクの煙を吐き出しながら膨らんだ。

もしOKだつたら今日から一人で同じ道を歩いて、でもお互いまだ照れてて、無言で歩く中で偶然に手が触れちゃつて舞ちゃんが「あつ…」めんねて小さく洩らして、そんな可愛い声に俺は更に照れちやつて下腹部のマイ遮断機も激しく点灯しちやつて、萌え死にしそうな俺が、

「手繫いづか…」

つて照れながら言つて、舞ちゃんが小さく頷いて…そんでそんで…。

「あーあ、まだOKつて言われて無いのによくそんな下ネタ交じりの妄想が浮かぶよな。薔薇色の脳味噌が羨ましい」

俺の想像をぶち壊すかの様に松が吐き捨てた。

ふつふつふつ…松よ、開けたな。

開けてはならないパンドラの箱を開けちゃつたな。

「よーし！俺に数時間後に訪れるであろう現実の予行演習を邪魔しちゃヤツには…少し逝つてもらうぞおー」

俺は、とびつきの萌えスマイルで再び松のコメカミにコロル攻撃

を喰らわせてあげた。

さつきよりも少しつ・よ・め・に・ね。

数秒後、机に突つ伏して痙攣している松を視界にいれずに、俺は舞ちゃんの事を考えた。

矢坂 舞。

通称、舞ちゃん。

聖蘭に入学して間もない純粋ボーイ俺を、虜にした女神。

しかし、幸せそうな顔で痙攣する松も、俺の為に部活中の舞ちゃんを呼びに行つた濱も口を揃えて、

「お前！あのミクロ星人のドコが良いんだよ」

つて言いやがる。

うつせえ…ミクロじや無え！

まあ確に、ちつちやいケド…俺の目から見れば誰よりもデッカイね。存在がさ。

今でも、忘れないぜ。初めて掲示委員の仕事で一人で掲示物を持って校内を巡ったあの日を。

グダグダと文句を垂れ流す俺の隣、小さな両手の中いっぱいに荷物を持つ舞ちゃんの一生懸命な顔。

俺が無愛想に荷物を持ってあげた時の喜んだ笑顔。その笑顔見てたら、何かすっげえ照れちゃって。

柄にもなく、めちゃくちゃ仕事を頑張っちゃって。

「この子の為なら、俺は何でも出来るって思えた。

それ以来、俺は舞ちゃんの笑顔が見たくて学校だって、委員会だって無遅刻無欠席じゃ！

聞いてんのかよ松！濱！

つて、二人には昼の図書館秘密会議でいつたんだった。

それに、Jの前のBBQでもらった舞ちゃん手作りのドーナツ。あのドーナツで俺の告白は決まったね。ずつげえ美味くて、母さんの料理の張れるぐらい美味しい。

俺以外の男に食わせたくないね。

舞ちゃんのドーナツは、俺だけのモンだつうの。

そう思ったから、今日告るんだ。

悪いか？松に濱！

つて、昼に口が酸っぱくなる程言つたんだつけ。

「ふう、久しぶりの痙攣も悪くないな」

俺が、自分自身にツッコミを入れた瞬間、いきなり松がガバッと机から起き上がつたもんだからビックリだ。

ビビる俺に一警を投げて、松が携帯を取り出し会話を始めた。

「あ、分かった。じゃ待ってるぞ」

数秒の会話の後に携帯は役目を終えて、再びポケットにしまわれた。多分会話の内容から濱からだと思われる。

電話を終えた松が真剣な顔をして俺の目を見た。

「なあ拓…実は」

「ま、まさか告白する前に振られたとか?」「何か、心臓がすっげえドギドキ言つてる。

「実は…俺は靈超類ヒト科だ。そして、一つ言つなら稀にみる美男子で彼女持ちだ」

「いやボケとかいらないから…早く内容を」

「何故、罪深き人間は、更に罪を重ねるのだろう…。人間こそが社会悪の元凶で、人が滅びれば罪の定義も消え、幸せが平等に訪れるのだろうか…えつ、なんだ…トムは、バターが作れるんだ」

「だからボケとか要らんて!つづか、前半部分の人間の存在と後半のトムのバターって関係無えだろ?それより、早くタクコに電話を内容を言つによ」

「濱から舞と合流したって電話だ。って事は、もう告白まで間近だな」

「ああ…今の俺の萌えつコネタにツツコミ入れて欲しかった。

つてかちゅ、ちょい待ち！

今何て言つた？もう間近？

まるでエコーがかかつたかの様に、松の言葉が俺の頭に響き渡つた。

つて事は、すでに舞ちゃんは俺の元に向かつてる？
つてかもう俺の初告白の大舞台！？

再び、ミスター心拍数が暴れだしやがる。

心拍数の上昇と共に不安が頭をかすめた。

も、もしZEROだつたら今まで通りに会話出来ないのか？
何か、お互いヨソヨソしくて、クラスに居づらくて。
顔もマトモに見れなかつたり？

委員会の仕事だつて……。

「もう覚悟は決まつてるか？」

松が、穏やかな目で笑つた。

「決まつて無えよ。すつげえ怖いぜよ。つてか何で嬉しいしあつなんだ
よー！」

「怒んな。実際に嬉しいんだよ」

「はあ？こきなり何だよ。持ち悪ついな……」

何か、男に嬉しいって言われるとキモいな……実際。

「小、中学の時は、お前いつもつまらなそうな顔をしててさ、何事にも不満つてヤツか？でも、聖蘭に入つて舞に出会つてからはいつも楽しそうで…ひひひひ父さんは嬉しいぞ」

「松…今日ノリ良いな…。いや、父さんか。ありがとつ

「誰が父さんだ。腐れ外道が！」

「ほお～。腐れ外道のソフトタッチ味・わ・う・か・い？」

俺が、笑顔で拳をグルグルと高速で回すと松が手をスリスリさせて謝つた。

「とにかく怖がる理由なんて無いだろ。図書館で俺と濱に言つた真っ直ぐな気持ちを舞に伝えれば良いんだ。お前のボケ無しの真剣な言葉なら絶対響く」

「伝わるか？松先輩、何か微妙な気がしますが…」

俺のイメージ上、男の告白は甘口言葉とマウスとマウスだ。

「こ」のバカ小市民が！男はな、好きなら好き。気持ち良いなら気持ち良いだ

は？

松…今とんでも無い事言わなかつたか？

気持ち良い？

それつて明らかに…。

慌てて口を押さえる松。

「コイツ、何か隠してんな。

「とにかく、真っ直ぐな気持ちを伝えろ！良い……」

その時、松の言葉を遮るかの様に濱が扉を勢い良く開けて駆け込んで、すぐに扉を閉めた。

「よお！十分振りだな。頼まれてた舞姫を連れてきたぜ！今俺の背中の扉一枚外で、少し待たせてあるぜえい！」

濱は、グイッ親指を立ててニカッと笑う。

ははっ！松に負けず劣らず濱も楽しそうだな。
何だかんだ言って、松の言葉や濱のお陰で大分落ち着いていたし、
恐怖心も吹き飛んだ。

「拓ちゃん、準備は？」

「俺に準備？そんな言葉は俺の辞書に載っていないな

「さつすが、拓ちゃん。嘘と虚栄で出来た男」

「俺も濱の言葉に一票を投じたい

「うーん、君達は大舞台の前に俺の心を碎くつもりかな？
ここ泣き叫んでも良いんだぞ。」

「じゃ、拓ちゃんが奏でる告白と言つ調を待つ舞姫を、扉の外からこの開場に招待するわ」

そう言つと、静かに瀬が扉を開けた。

目の前に俺の小さな宝物が首を傾げて立っていた。

「あ、拓君だ」

俺の顔を見てニッコリと微笑む宝物。

この笑顔を俺は手に出来るのかな？

いや手に入れるんじゃない。

手を繋いでいいんだ。

優しく繋いでいたい。

「それじゃ、俺と瀬は出るわ。拓…お前なら上手く伝えられる。俺が保証するぞ」

「そうだよ。大丈ビだ。あつと、手伝つたお代は、手作りドーナツでヨロシクね」

「ありがとな…松、瀬」

そして、俺の大舞台の幕が上がった。

「ドーナツ? ふふつ、あの一人もドーナツが大好きなんだね。さすが仲良しさん」

一人が出て行き、扉が閉まるとき舞ちゃんがニコニコと笑う。

「うん…俺達はドーナツが大好きなんだ。それで今日、舞ちゃんを呼んだ理由はね…」

なあ、濱と松。

俺は、この大舞台で上手く、真っ直ぐに言えただろうか。

いや上手く行つたかどうかなんて誰にも解かないか…解つたら恋や告白なんて詰まらないモノだよな。

分かつた事は、友達の有り難みと真っ直ぐな気持ちの大切さか。

(後書き)

読んでいただきありがとうございました。

気付いた方も居ると思いますが、この短編は今連載中の作品に少しリンクしています。

どう影響するかは、まだ言えませんが…（苦笑）

感想やコメントをお待ちしております。

ではー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1004b/>

告白の結果はドーナツ

2010年10月16日00時46分発行